

大坂奉行所刑事判決例三十七題：近世中葉大坂地方 に行はれたる刑事的法則(四・完)

金田, 平一郎
九州帝国大学法文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/14449>

出版情報：法政研究. 9 (2), pp.107-154, 1939-05-15. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



大坂奉行所刑事判決例三十七題

— 近世中葉大坂地方に行はれたる刑事的法則(四・完) —

金 田 平 一 郎

目 次

偽造の罪	
保證に關する罪	
賭博の罪	
強盜及び竊盜の罪	
贓物に關する罪	
幼年者婦女特別處遇制	
『關所』制	
裁判及び行刑に關する雜則	
結語	

偽造の罪

大坂奉行所刑事判決例三十七題

(一)

第五十九判決例 (「諸吟味窺書寫」天明六年の分收録)

謀書之振手形ニ而銀子かたり取候者又ハ強盜并引合之もの共「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」(略中) 右之者共御仕置黄紙下札を以奉窺候以上「午正月」小田切土佐守「御城代阿部能登守殿御附札」此久四郎儀伺之通大坂三郷町中引廻之上獄門可被申付候「黄紙」此久四郎儀謀書之振手形取捨似寄之印形を押所ニ而銀子かたり取候段不届至極ニ付大坂三郷町中引廻之上獄門可申付候哉」(略下)

此判決例は、「公事方御定書」下卷第六十二條『謀書謀判いたし候もの御仕置之事』(「徳川禁令考」後集第三(第三帙四八五頁)の條の

第二項

寛保二年極

一謀書又ハ謀判いたし候もの

引廻之上

獄

門

但加判人死罪

又、大坂裁判の準則でもあつたことを證明するに足るものであらう(「徳川禁令考」後集第三(第三帙四九七頁以下参照)。

(二) 徳川中葉時代、大坂地方に行はれたる、貨幣偽造犯及び偽造貨幣行使犯處斷の原則は、次の判例に就いて之を窺ふことが出来る。

第六十判決例 (「御吟味物料書并御伺書控」收録)

元文四未年「似せ銀札一件之者」科書「掛り役人仁木右近右衛門由比甚右衛門」岡部美濃守當地藏屋敷留
守居之者訴趣ハ美濃守領分通用之銀札札元々差出置候ハ札多ク相見ヘ候ニ付内々及吟味居候處紛敷銀札
持參之者有之ニ付押ヘ置様子尋候處其身ハ大坂天滿三丁目小豆嶋屋六右衛門借屋吉田屋喜兵衛と申者ニ而
阿波町大津屋利兵衛借屋中嶋屋彦右衛門方銀札請取候而彦右衛門方銀子引替ニ相越候則彦右衛門義も
大坂町はつれ迄出迎居候由喜兵衛申口ニよつて彦右衛門をも押候得共兩人共當地居住之ものニ候間吟味相
願候旨訴出ニ付一件遂吟味候上太田備中守に御仕置相達候書付寫「御城代御附ケ紙寫」町中引廻シ磔可被中
付候^(朱)書「未七月十四日入牢阿波町大津屋利兵衛借家中嶋屋彦右衛門」黃紙御下ケ札寫「町中引廻シ磔可
中付哉^(朱)書」右彦右衛門儀多田屋勘兵衛申合泉州岸和田通用之銀札似せ候ニ付銀札之板行ハ勘兵衛ニ彫せ
札ハ彦右衛門方ニ而捨吉田屋喜兵衛ニ申付彼地ニ爲持遺シ右似せ銀札を以銀子引替候科「御附ケ紙寫」磔
可被中付候^(朱)書「未七月十四日入牢上難波町木村屋三郎兵衛借屋多田屋勘兵衛」黃紙御下ケ札寫「此者右
彦右衛門同罪ニも可申付ものニ御座候得共致病死候ニ付死骸討首可申哉^(朱)書」右勘兵衛儀中嶋屋彦右衛門
申合泉州岸和田通用之銀札似せ候ニ付銀札之板行勘兵衛彫立札ハ彦右衛門方ニ而仕立右似せ銀札を以引替
候銀子を配分いたし候科「御附ケ紙寫」町中引廻シ獄門可被申付候^(朱)書「未七月十四日入牢天滿三丁目小
豆嶋屋六右衛門借家吉田屋喜兵衛」黃紙御下ケ札寫「町中引廻シ死罪獄門可申付哉^(朱)書」右喜兵衛儀中嶋
屋彦右衛門多田屋勘兵衛申合捨候泉州岸和田通用銀札之似せ札彦右衛門使ニ成彼地に持參銀子ニ引替配分

いたし候科」御附ケ札寫」三郷拂可被申付候^(朱書)」未七月十六日所預ケ南濱町柏原屋茂兵衛借家中嶋屋忠次郎母しゆん」黃紙御下ケ札寫」三郷拂可申付哉^(朱書)」右しゆん儀中嶋屋彦右衛門妻之妹ニ候處幼少之忤忠次郎名前ニ而柏原屋茂兵衛借屋ニ罷在右借屋二階ニ而彦右衛門似せ札拵候得共不審ニ存居候迄ニ而一切様子不存旨申之申合候筋ハ不相聞候得共不念之仕形不埒ニ付」御附ケ紙寫」領主ヘ相渡仕置之儀ハ勝手次第可被申付旨可被申渡候^(朱書)」岡部美濃守領分泉州岸和田濱町鯛屋庄次郎借家春木屋喜兵衛」黃紙御下ケ札寫」所拂可申付哉」但領主ニ而勝手次第仕置申付候様ニ可申渡哉^(朱書)」右喜兵衛儀似せ銀札と申儀不心中嶋屋彦右衛門吉田屋喜兵衛相頼ニまかせ度ニ銀子引替遣し馴合候筋ハ不相聞候得共不念之仕形不埒ニ付」右之者備中守殿差圖付札之通未十二月廿六日御仕置申付候^(朱書)

〔徳川禁令考〕後聚^(第三帙五七一頁)の條

従前々之例

一 似せ金銀拵候もの

引廻之上
礙

擬て、貨幣偽造に關する「公事方御定書」の原則は、その下卷第六十七條『似せ金銀拵候もの御仕置之事』であるが、此原則又大坂の原則であつたか否か。今御定書制定後の大坂判例を擧げ得ないのであるが、御定書成立直前の右元文度の大坂判決の内容よりして、御定書の右の原則又、大坂にも行はれたとの推定が許るされはしまいか。

尙ほ、右元文の判決は、大坂には當時、此方面に關し、相當詳細なる制規の存在したことを知らしめるのである。之に對し、江戸方に於ては如何。今その詳細を悉くし得ないが、御定書の貨幣偽造に關する法條が前出の如く、甚だ簡單であることより見るならば、御定書前の江戸の此種の法則又、詳細ではなかつたと推測し得られはしまいか。少くとも、此種犯罪に對する刑事制度にして、江戸より大坂の方が一步先に整備し、江戸方之に追隨するの傾向ありしは事實である。大坂にては、右元文の判決に見える通り、既に早くより、刑罰實行前に死亡せる貨幣偽造行使者の死骸討首（磔）制を實施したのに對し、江戸方にては、はるか後代文化以降、此制度が行はれるに至つたが如き事實（「古事類苑」法律部第二、九四八頁以下）、その一微證である。此の如き現象は、大坂の經濟的地位が、之を招來せるものと云ふべきか。

（三）「公事方御定書」には、更に別に偽造犯に關する法條が存する。その下卷第六十六條の第二項似せ藥種賣却の罪に關する條項（「徳川禁令考」後聚第三帙五六四頁）及び同上第六十八條の秤偽造、榼偽造、朱墨偽造に關する條項（同上五七九頁）がそれであるが、之等又、大坂の原則でもあつたのではあるまいか（「徳川禁令考」後聚第三帙五六六頁以下、五八五頁以下參照）。

保證に關する罪

第六十一判決例（「諸御吟味落着書留」收録）

辰八月三日吟味已十月廿七日落着「一身元不知女を所々に奉公ニ出候一件」内淡路町三丁目石川屋平兵

大坂奉行所刑事判決例三十七題

衛借屋大墨屋宇兵衛女房さき儀高津新地壹丁目大坂屋小四郎借屋赤尾屋善兵衛天王寺中小路町住宅之節善兵衛方ニ而身賣奉公相勤居候を釣鐘(原鏡とあるは誤ならん)上之町丁代源七世話を以年季之内ニ暇取宇兵衛方に縁付致し候處善兵衛儀同借屋播磨屋庄兵衛同家理右衛門申合右致立銀候歟亦者立歸致奉公候様及催促候ニ付宇兵衛義可離縁由申身分之妨ニ相成候段令出訴善兵衛仕方紛鋪相聞候ニ付右携候者共入牢所預ケ等申付遂吟味候處善兵衛申候者去辰七月下旬迄天王寺中小路町炭屋五郎右衛門借屋ニ罷有マ堺南御坊前町かわち屋利兵衛娘さき與申者高津新地壹丁目大坂屋小四郎借屋播磨屋庄兵衛同家利右衛門肝煎を以三年以前卯十二月ハ貳年ハケ月切給銀貳百七拾目ニ而抱利右衛門に渡さきニ身賣致し候様ニ申候者不得心ニ而暇吳候様ニ申候得共最初より身賣致させ候積リニ而抱候事故達而相勤させ候處家主聞付不宜儀ニ候間相止メ候歟亦者家替可致旨申ニ付外借屋可參と存居候内さき儀去年五月致家出行衛不相知ニ付其段訴出候由然ル所同月下旬さき伯父申マ釣鐘(原鏡)上之町丁代源七さきを召連參りさき儀者被勾引參奉公ニ出候事ニ候間暇指出候哉無左候ハ紛敷奉公致させ候段可願出旨申則天王寺村庄屋方にも相届候ニ付親利兵衛得心ニ而奉公ニ出候を右之通申候儀不審ニ存利兵衛に可申談と存候得共間取候内源七及出訴候而者隱賣女令渡世候趣相顯可申と肝煎利右衛門對談之上下ニ而相濟吳候様源七方に申遣候處さきを源七に渡以來無申分旨之致證文候ハ、下ニ而可相濟旨申ニ付右之證文可致間源七ハ茂さき伯父ニ無相違と之致證文候哉與申聞源七得心之上五ニ證文取替シさきを源七に渡相濟候ニ付利兵衛方に右之趣申達立銀致シ候様申遣候處さき儀利兵衛娘ニ無之元來紀州

家中細井八左衛門長屋ニ居候佐兵衛と申者利兵衛方に連參候由ニ而則使之者ニ理兵衛方の人を指添佐兵衛方に右之様子申遣候得者さきニは親類無之筈ニ候間、紀候上可致返答旨佐兵衛方申越其後佐兵衛直に善兵衛方に参さき親類之儀聞合候處一切無之源七偽り事ニ候間早々さを取戻候様申ニ付利右衛門佐兵衛申合度源七方に参りさき指返シ候歟又者致立銀候様及催促候旨申^二ニ付右之通出所不慥成奉公人を抱爲致身賣候仕方全理右衛門佐兵衛理兵衛三人之者申合兼而右體之者引請銀子食候事與相聞候間有體可申旨重々遂吟味候處右之者共申合出所^{〔原訴は誤ならん〕}不知者を抱銀子食候儀毛頭無之さき儀者利兵衛娘ニ無相違儀與存抱候由爲致身賣候段は吟味之上無申披旨申之ニ付右ニ携候者共追々遂吟味候處右善兵衛申口同事ニ付口書申付候内善兵衛并紀州參候佐兵衛儀令病死ニ付殘ル者共左之通片付申渡ス一釣鐘上之町丁代源七儀さを引請世話いたし候段被願候ニ者無相違勿論徳用取候儀者無之候得共身分ニ不抱儀を取持好身無之者を娘と偽リ主人方暇出させ候仕方不届ニ付三郷拂申付候^一一堺南御坊前町和泉屋吉右衛門借屋河内屋利兵衛儀出所不知女を引請再應奉公ニ出し剩娘と偽リ親判いたし候段不届ニ付攝河拂申付候^{〔中略〕}口書掛り小泉伊右衛門磯矢市左衛門

本判決に於ける河内屋利兵衛の『娘と偽リ親判^{〔保證〕}いたし候』なる行爲は、謀書的一種でもあるが、又一面保證に關する犯罪である。

扱て、此判決に依つて知らるゝ大坂の原則^{〔拙文、「大坂奉行所刑事判決例十六題」一「本誌七卷一號所載——遺棄の罪の條、判例近世大坂私法一斑」——中田先生還曆祝賀法制史論集〕}所收^一一八頁末大坂奉行所刑事判決例三十七題

段參)は、「公事方御定書」中その該當例を見出し得ないが、その下卷第四十二條『奉公人請人御仕置之事』(「徳川禁令考」後案)の條の第十四項の如き、その精神に於ては、同類と云ふべきが。

尙ほ、右の判決にて、奉公人の身元を糺さすその保證人となること又、犯罪であつたことを知り得るのであるが、此點に就いては、別に次の如きより適當なる判決例が見られる(江戸の原則は、例へば「徳川禁令考」後案第二帙六八四頁等參照)。

第六十二判決例 (吟味御用落着書「二收録」)

寶曆元辛未年十一月十九日落着」相使八田伴右衛門「藤堂和泉守御預り所和州吉野郡三尾村小川谷藏心寺
 渡邊民部御代官所攝州住吉郡寺岡村慈光寺弟子ニ遣置候禪洞儀先達而出寺致し候所此度禪洞行衛之儀ニ
 付藏心寺儀慈光寺相手取當四月廿日願出ニ付及吟味候内禪洞儀還俗致し房之助と名改當時道頓堀布袋町ま
 す屋伊兵衛借屋花桐吉十郎同家忤歌舞伎役者花桐喜十郎方ニ役者弟子奉公相勤居候由同五月十一日慈光寺
 方に立歸候旨召連出ニ付右ニ掛り合候者とも呼出一件遂吟味酒井讃岐守殿に相伺候上落着申渡覺」渡邊民
 部御代官所攝州住吉郡寺岡村城州八幡神應寺末寺禪宗曹洞派慈光寺」其方儀藏心寺の弟子ニ貴置候禪洞事
 房之助儀盜氣有之ニ付爲異見之同國堀村番非人嘉兵衛方に當分預々置候内嘉兵衛連レ出嘉兵衛實子之様ニ
 申僞役者奉公ニ指出候儀ニて嘉兵衛と馴合候筋とハ不相聞候へとも房之助を藏心寺の弟子ニ貴候以來寺人
 別ニも不相加其上異見之ためとハ申幼少之者を番非人等に預置候が事發嘉兵衛連出役者奉公ニ指出候様
 ニ相成リ剩房之助出寺斷をも不申出段重々不念之至ニ付五十日逼塞申付候且亦房之助儀者主人喜太郎が取

戻し藏心寺代龍淵寺に相渡可申候」(中略) 姉川千五郎方ニ當分罷在候鏡心」其方儀前方攝州北平野町貳丁目若松屋つね借屋ニて京屋治郎兵衛と申候節なら屋半右衛門并堀村嘉兵衛任相頼ニ嘉兵衛番非人と申儀茂不存勿論房之助儀も嘉兵衛實子ニ無紛事と存攝州今在家村百姓庄兵衛請人ニ而嘉兵衛より頼證文取之其上ニて其方請人ニ相立房之助を千五郎方に弟子奉公ニ指出候由申之其段無相違相聞候へとも請人相立候上者嘉兵衛身元を茂見、盾房之助、儀實子ニ無紛哉之儀も聞糺可申所無其儀不念之事ニ候然レとも嘉兵衛と馴合候筋も無之ニ付令用捨候條向後右體不念之儀無之様可入念候」(中略) 渡邊民部御代官所攝州住吉郡今在家村百姓庄助かし屋百姓庄兵衛」其方儀前方河州東爪破村ニて綿打渡世ニ致シ居候節堀村百姓之由を申嘉兵衛義度と綿賃打ニ指越其以來心安相成候所嘉兵衛義年貢收納に指詰候故忤房之助を役者奉公ニ指出し度候間何方に成りとも肝煎吳候様相頼に付父休清を以なら屋半右衛門まで頼置候處其後半右衛門并嘉兵衛鏡心と姉川千五部に直談致し房之助を千五郎弟子ニ抱候間請人鏡心に嘉兵衛を指遣候頼證文ニ其方儀請人印形致し吳候様鏡心頼ニ付請印致し候事之由申之嘉兵衛と馴合徳用ニ抱リ請人ニ立候事と者不相聞候へとも嘉兵衛義堀村百姓ニ候哉并房之助儀者實子ニ無相違哉之儀得と不相糺嘉兵衛任頼ニ請人ニ立候段不念之至ニ付過料申付候」(中略) 右之通申渡候條一件并庄屋年寄丁人共可令承知候」未十一月十九日

賭博の罪

第六十三判決例 (「諸吟味竄書寫」天明三年の分收録)

博突仕候者一件「御仕置窺書」土屋駿河守「所」ニ而博突仕候者共多有之趣相聞候付手當申付怪敷相聞候も
 の共召捕吟味仕候趣左之通御座候」(中略)御城代戸田因幡守殿御附札卯二月八日下ル同十六日落着「此次右
 衛門儀伺之通遠嶋可被申付候」此次右衛門儀喜八長右衛門源藏申合博突簡取仕候段不届至極ニ付遠嶋可申
 付哉「此孫兵衛儀伺之通遠嶋可被申付候」(城代附札)「此孫兵衛儀博突之宿」(原者は誤)仕候段不届至極ニ付遠嶋可申付
 哉「此六兵衛儀伺之通そよ差置候借屋五ヶ年取上可被申候」(城代附札)「此六兵衛儀三郎兵衛に支配爲致置候借屋
 内ニ而博突有之上は兼而家守三郎兵衛に之申付方不行届故之儀不埒ニ付そよ差置候借屋五ヶ年取上可申哉」
 此者共儀伺之通庄屋は五貫文五人組年寄は三貫文宛過料可被申付候」(城代附札)「此者共儀村内ニ而博突有之を不
 存罷在候段兼而之改方不行届右之儀不埒ニ付庄屋は五貫文五人組年寄は三貫文宛過料可申付哉」此者共儀
 伺之通兩隣は身上ニ應過料家並は三貫文宛過料可被申付候」(城代附札)「此者共儀同借屋そよ方ニ而博突有之を
 不心付罷在候段不埒ニ付兩隣は身上ニ應過料家並者三貫文宛過料可申付哉」此喜兵衛儀伺之通遠嶋可被申
 付候」(城代附札)「此喜兵衛儀博突簡取仕候段不届至極ニ付遠嶋可申付哉」此三郎兵衛儀伺之通存命ニ候ハ、所
 持之品取上居村并大坂三郷拂可申付者ニ候段一件之者に可被申渡候」(城代附札)「此三郎兵衛儀博突場に拂簡方
 之世話役いたし候段不埒ニ付存命ニ候ハ、所持之品取上居村并大坂三郷拂可申付者ニ候段一件之ものに可
 申渡哉」此者共儀伺之通市兵衛は重追放磯七は攝河兩國拂新兵衛は家財取上居村并大坂三郷拂可被申付候

〔城代附札〕「此市兵衛外貳人儀、喜兵衛ニ被雇博突場に、携小仕并世話役いたし、市兵衛磯七儀は御構之場所に茂立

入候段旁不届ニ付市兵衛は重追放磯七は攝河兩國拂新兵衛は家財取上居村并大坂三郷拂可申付哉」此藤

藏儀伺之通存命ニ候ハ、咎之不及沙汰候者ニ候段一件之者に可被申渡候〔城代附札〕「此藤藏儀博突仕候段不届

御座候得共無宿者之儀ニ付存命ニ候ハ、五貫文過料可申付哉之旨可相伺處數日咎之不及沙汰入牢申付置

候間令宥免候者ニ候段一件之者に可申渡候哉」此宗保儀伺之通身上ニ應重キ過料之上、百日手鎖可被申付候

〔城代附札〕「此宗保儀支配之借屋ニ而博突有之上ハ兼而之改方不行届故之儀不埒ニ付身上ニ應重キ過料之上、百

日手鎖可申付哉」此清五郎儀伺之通吉兵衛半兵衛差置候借屋三ヶ年取上可被申候〔城代附札〕「此清五郎儀宗保

に支配爲致置候借屋内ニ而博突有之上ハ兼而家守宗保に之申付方不行届故之儀不埒ニ候得共他町住居之者

ニ付吉兵衛半兵衛差置候借屋三ヶ年取上可申哉」此者共儀伺之通庄屋は五貫文五人組年寄は三貫文宛過料

可被申付候〔城代附札〕「此者共儀料内ニ而博突有之を不存罷在候上者兼而之改方不行届故之儀不埒ニ付庄屋は

五貫文五人組年寄は三貫文宛過料可申付哉」此者共儀伺之通西〔城代附札〕「此者共儀同借屋半兵衛吉兵衛方ニ而博突有之を不心付罷在候段不埒ニ

付西〔城代附札〕「此者共儀同借屋半兵衛吉兵衛方ニ而博突有之を不心付罷在候段不埒ニ付西〔城代附札〕隣は身上ニ應過料家並は三貫文宛向側は小間ニ應過料可申付哉

第六十四判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明五年の分收録

博突仕候一件「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」〔中略〕右之者共御仕置黃

紙下札を以奉窺候以上」已六月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「此六兵衛庄八十助儀伺之通
過料五貫文申付六兵衛儀者無宿者ニ付難差出旨申候ハ、五十日手鎖申付十助儀も存命ニ候ハ、庄八同様可
申付ものニ候段一件之者に可被申渡候」黄紙「此六兵衛庄八十助儀御法度之賽博突いたし候段不届ニ付家
財家藏取上候程之過料可申付候哉之段可相伺處三人共無身上之者ニ御座候間過料五貫文申付六兵衛儀ハ無
宿者ニ付難差出旨申候ハ、五十日手鎖申付十助儀者存命ニ候ハ、庄八同様可申付者ニ候段一件之者に可申
渡候哉」此次兵衛儀存命ニ候ハ、伺通急度叱リ置可申者ニ候段一件之者に可被申渡候(城代附札)「此次兵衛儀
御法度之博突打候席ニ見物いたし罷在候段不届ニ付存命候ハ、急度叱リ置可申もの候段一件之者可申渡候
哉」(黄紙)「此庄兵衛儀伺之處身上ニ應重過料之上百日手鎖可被申付候」(城代附札)「此庄兵衛儀支配之借屋内にて
博突宿いたし候儀不存罷在候段全改方疎故之儀不埒ニ付身上ニ應重キ過料之上百日手鎖可申付候哉」(黄紙)
此五人組年寄儀伺之處五人組ハ身上ニ應過料年寄過料五貫文可被申付候」(城代附札)「此五人組年寄儀町内布屋
庄兵衛支配之借屋内ニ而博突宿致候儀を不存罷在候段兼而之中合不行届故之儀不念ニ付五人組ハ身上ニ應
過料年寄者過料五貫文可申付候哉」(黄紙)「此者〇家並之者共儀伺之通過料三貫文つゝ向側之者小間ニ應過料可
被申付候」(城代附札)「此者共儀平兵衛宅ニ而博突宿致候儀を不存罷在候段不念ニ付家並之者ハ過料三貫文つゝ向
側之者者小間ニ應過料可申付哉」(黄紙)「此吉兵衛儀伺之通平兵衛差置候借屋三ヶ年取上可被申候」(城代附札)「此
吉兵衛儀掛屋敷借屋之内ニ而博突宿いたし候者有之候段兼而家守に申付方不行届不念ニ付平兵衛差置候借

屋三ヶ年取上可申候哉(黄紙)

第六十五判決例 (「諸吟味窺書寫」天明七年の分收録)

博突一件「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候(略中)右之者共御仕置黄紙下ヶ札を以奉窺候以上「未正月」小田切土佐守「御城代阿部能登守殿御附札」此佐兵衛儀伺之通所持之雜物取上居村并大坂三郷拂可被申付候「黄紙」此佐兵衛儀博突場所ニ携筒方之ものが賃錢貰受寄合候者に茶たはこ等(頃等重田)之世話致候段不埒ニ付所持之雜物取上居村并大坂三郷拂可申付候哉「此彌三郎儀伺之通過料五貫文可申付者ニ候處數日入窄申付置候間咎之不及沙汰候旨申渡博突勝候南鐐錢不殘取上門前拂可被申付候(城代附札)」同(黄紙)此彌三郎儀博突仕候段不埒ニ御座候間無宿者ニ付過料五貫文可申付候哉之旨可相伺處數日入窄申付置候間咎之不及沙汰候旨申渡博突ニ勝候南鐐錢不殘取上門前拂可申付候哉「此了玄儀伺之通身上ニ應し重過料之上百日手鎖可被申付候(城代附札)」同(黄紙)此了玄儀支配之かし屋内ニ博突有之上ハ兼而之改方不行届故之儀不埒ニ付身上ニ應重過料之上百日手鎖可申付候哉「此ふき儀伺之通甚兵衛差置候借屋三ヶ年取上ヶ可被申付候(城代附札)」「黄紙」此ふき儀他町ニ而了玄ニ支配致させ置候借屋内ニ而博突有之上ハ兼而家守に之申付方不行届故之儀不念ニ付甚兵衛差置候借屋三ヶ年取上可申付候哉「此者共儀伺之通庄屋ハ五貫文五人組年寄者三貫文宛過料可被申付候(城代附札)」同(黄紙)「此者共儀村方ニ而博突有之を不存罷在候段ハ兼而之改方不行届故之儀不念ニ付庄屋ハ五貫文五人組年寄は三貫文宛過料可申付候哉」此者共之儀伺之

通隣家之者は身上に應過料向側は小間應過料可被申付候（城代）「同〇黄」此者共儀甚兵衛方ニ而博突有之
を不心付罷在候段不念に付隣家之者者身上ニ應シ過料向側ハ小間ニ應過料可申付候哉

以上の三判決を通して、近世中葉時代の大坂に於ける、賭博犯處遇原則一斑を窺ふことが出来ると思ふ。而してそれは次の如くなる。即ち（一）博突筒取―遠嶋、（二）博突宿―遠嶋、（三）博突者―家財家藏取上候程の過料但し無身上者は過料五貫文、（四）博突場に關係筒方の世話役をなせる者及びその他小使等をなせる者―所持の品取上居村及び大坂三郷拂、（五）博突の行はれし家の家持―該家屋三ヶ年又は五ヶ年取上、（六）支配借屋に博突ありし家守―身上に應じ重過料、（七）博突ありし村の庄屋―過料五貫文、同上五人組―身上に應じ重過料又は過料三貫文、同上年寄―五貫文又は三貫文過料、（八）博突の行はれし家の兩隣―身上に應じ過料又は過料三貫文、同上向側―小間に應じ過料、（九）博突見物者―急度叱。（十）更に後出第九十五判決例に依つて、博突の場にて肴商者―急度叱の原則を知り得る。

「公事方御定書」に於ても、その下卷第五十五條「三等附博突打取退無盡御仕置之事」（「徳川禁令考」後聚第三帙二一九頁）の條に、二十九項より成る、賭博犯に關する詳細な法則が設けられて居る。今その中から、右掲出の大坂に於ける各賭博犯（尙ほ取退無盡大坂にても、當時勿論處罰せられた、具體例として、）と、同類の罪様と見らるゝ場合の規定を拾ふならば、二十九項中第一項乃至第九項及び第十三項乃至第二十一項の十八項、即ち次の如きものがそれである。

（第一項乃至第九項）

享保十一年極

一 三笠附點者同金元并宿

同

一 博突打筒取并宿

寛保元年極

一 取退無盡頭取并宿

享保十一年極

一 三笠附旬拾

寛保元年極

一 取退無盡札賣

寛保元年極

一 取退無盡闔振せわやき

享保十一年極

一 三笠附いたし候もの

同

一 博突打候もの

大坂奉行所刑事判決例三十七題

遠 島

家財取上
非 人 手 下

家財取上
江 戸 拂

家財家藏取上候程之過料
家藏無之ものハ五貫文或
三貫文過料

寛保元年極

一 取退無盡いたし候もの

(第十三項乃至第二十一項)

享保十一年

延享二年極

一 三笠附點者金元井宿之家主

同

一 博奕宿井筒取致候もの家主

享保元年

延享二年極

一 取退無盡宿井頭取之家主

享保十一年

寛保元年極

一 同地主

屋敷取上

享保十五年

同十六年極

但五ヶ年過元地主に返し被下之外にていたし候もの之地主ハ三ヶ年過返し可被下

享保二十年極

身上ニ應シ過料之上百日手鎖

附其日稼之もの商先にて當分博奕筒取いたし候類ハ地主并所之もの共不及咎

享保十一年
延享二年極

一三笠附宿

同

一博奕打宿 兩隣并五人組

享保元年
延享二年極

一取退無盡宿

元文元年極

但在方ハ組頭五人組共過料

延享元年極

一同名主

享保十一年
延享元年極

一同町内

大坂奉行所刑事判決例三十七題

身上ニ應し過料

在町方共
過料五貫文

家並
過料三貫文ツ、
向側小間に應し
過料

追加
従前々之例

但在方ハ村高ニ應シ過料

扱て、又こゝに、右大坂賭博刑法と此御定書の原則とを比較對照して見るに、その細目に至る迄合一するとは云へないが、而して少くとも右對照の限りに於ては、大坂方の制度が、御定書上のそれより詳密であつたと云はねばならないのであるが、制度の大綱要領に於ては、兩者殆んど同一と云ふことが出來はしまいか。

強盜及び窃盜の罪

第六十六判決例 (「諸吟味竊書寫」天明三年の分收錄)

盜賊并盜物出所不糺之品質入又は賣拂候者」御仕置窺書」土屋駿河守」寅七月十三日入牢油町三丁目鹽屋彌兵衛同家兄儀兵衛寅貳拾七歳」(略中)此儀兵衛儀伺之通大坂三郷ニ罷在間敷旨可被申渡候」(城代戸田因幡守殿御附札以下同じ)此儀兵衛儀金高之盜(金四兩壹分南鐐三拾片銀七百七金四匁盜取)仕剩外ハ盜賊入込候躰ニ取繕置候段不届至極ニ付死罪可相伺處同家主彌兵衛儀義兵衛は兄ニ而殊盜取候金銀相揃損失も無之上は旁無申分旨申立御仕置宥恕之儀相願候間大坂三郷ニ罷在間敷旨可申渡哉」寅八月十三日入牢無宿與八寅貳拾貳歳」(略中)此與八儀伺之通敵可被申付候」此與八儀町家店先ニ而致盜候段不届ニ付敵可申付哉」寅八月十五日入牢無宿文吉寅貳拾壹歳」(略中)此文吉儀

伺、之、通、町、中、引、廻、之、上、死、罪、可、被、申、付、候、其、外、可、爲、朱、書、之、通、此文、吉、儀、所、町、家、并、武、家、屋敷、中、間、部、屋、入、口、之、錠、并、
ひ、ち、坪、又、者、か、け、か、ね、等、ね、ち、明、ケ、内、に、這、入、度、盗、い、た、し、候、段、不、届、至、極、ニ付、町、中、引、廻、之、上、死、罪、可、申、付、哉、 寅、八、
月、廿、七、日、入、牢、長、町、四、丁、目、紀、伊、國、屋、三、郎、兵、衛、借、屋、安、井、屋、伊、右、衛、門、寅、貳、十、九、歲、(中) 此、伊、右、衛、門、儀、入、墨、重、敲、可、被、
申、付、候、其、外、可、爲、朱、書、之、通、候、此、伊、右、衛、門、儀、手、元、ニ、有、之、候、品、盗、取、剩、盜、物、并、出、所、不、紀、之、品、を、も、質、ニ、入、又、者、賣、
拂、遣、候、段、不、届、ニ付、入、墨、敲、可、申、付、哉、

第六十七判決例 (「諸吟味窺書寫」天明三年の分收錄)

盜賊九人「御仕置窺書」土屋駿河守(中)「右之者共御仕置黃紙下札を以奉伺候以上」寅十二月「土屋駿河

守」御城代戸田因幡守殿御附札卯二月十五日下ル
同十八日落着「此平八儀伺之通入墨之上重敲可被申付候其外可爲朱書之

通候」此平八儀先達而盜仕敲申付候處又候町家店先并手元之品又は表裏口等ニ干有之候品盗取候段不届

ニ付入墨之上重敲可申付哉」此藤八儀伺之通助命被申付大坂三郷ニ罷在間敷旨可被申渡候其外可爲朱書之

通候」此藤八儀主人佐兵衛方に質物ニ取置候品都合銀高ニ當リ候盜仕(絹綿入拾三同綿入羽織袴同帶貳筋毛綿
布子拾同拾三同拾羽織袴四同綿入羽織袴

召仕候者之儀不便ニ存殊被盜取候品相揃候上者旁無申分旨御仕置有免之儀相願候間大坂三郷罷在間敷旨可

申渡哉」此與惣兵衛儀伺之通敲可被申付候」此與三兵衛儀町家格子之内ニ有之品外盗取候段不届ニ付敲

可申付哉」此清八儀伺之通敲可被申付候」此清八儀所濱先川中ニ有之候材木盜取候段不届ニ付敲可申付

哉」此幸圓儀存命ニ候ハ、伺之通入墨敲可申付者ニ候段一件之者に可被申渡候」此幸圓所々ニ而手元之品盜取候段不届ニ付入墨敲可申付哉」此伊兵衛儀伺之通敲可被申付候」此伊兵衛儀途中之盜仕候段不届ニ付敲可申付哉」此文藏儀伺之通敲可被申付候」此文藏儀軒下ニおろし置候駕籠之内之蒲團盜取候段不届ニ付敲可申付哉」此金藏儀伺之通敲可被申付候」此金藏儀芝居ニ而見物人傍ニ有之候品盜取候段不届ニ付敲可申付哉」此佐助儀伺之通敲可被申付候」此佐助儀番小屋入口并途中之盜仕候段不届ニ付敲可申付哉

第六十八判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明三年の分收録)

盜賊七人」御仕置窺書」土屋駿河守」(略中)「此者共儀伺之通喜六は死罪彌七は敲可被申付候其外可爲朱書之通候(御城代戸田因睡守御附札)「此者共儀喜六は先達而盜いたし入墨之上重敲申付候處又候戸明有之内に入其外途中店先手元之品又は入湯人脱置候品等盜取彌七儀も店先之品盜取候段不届ニ付喜六は死罪彌七は敲可申付哉」(略中)「此清吉儀伺之通敲可被申付候」此清吉儀風呂屋ニ而入湯人脱置候品并寺院境内囊錢箱之錢盜取候段不届ニ付敲可申付哉」(略下)

第六十九判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明五年の分收録)

盜賊三人并盜物持運配分取又ハ怪鋪品下直ニ買賣捌候者」御仕置窺書」(略中)「右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」巳六月」小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此權八儀伺之通獄門申付岩松儀も存命候ハ、獄門可申付候段一件之者に可被申渡候」黃紙」此權八岩松儀行衛不知馬之助喜八長太定治郎等申

合所、百姓家入口井土藏之戸明懸リ在之内に入又ハ土藏窓之子をはづし忍入盗いたし其上新七にも盗物持運爲致分ケ口差遣剩國崎村ニ而捕懸リ候非人番之ものに手疵負セ候段重々不届至極ニ付兩人とも獄門可申付候哉」此新七儀伺之通敲之上輕追放可被申付候」同^{○黄紙}「此新七儀土藏に忍入候盜賊ニ被頼盜もの持運遣配分取候段不届ニ付敲之上輕追放可申付候哉」此安治郎儀伺之通家財取上所拂可被申付候」同^{○黄紙}「此安治郎儀古手株加不申以前當分手馴候ためニ候迎無株ニ而致商賣其上岩松賣拂候品怪敷乍心付直段下直ニ買取賣捌候段旁不埒ニ付家財取上所拂可申付候哉」此利ハ儀伺之通死罪可被申付候」同^{○黄紙}「此利ハ儀先達而も盗いたし候付入墨之上重敲申付候身分ニ而又候盜可致與町家に忍入候段不届至極ニ付死罪可申付候哉

第七十判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明五年の分收録)

盜賊四人并出所不糺之品賣拂之世話引受御構之場所に立入候者」御仕置窺書」(中略)「右之者共御仕置黄紙下札を以奉窺候以上」巳六月「小田切土佐守」御城代阿部能登守御附札」(中略)「此金藏源助儀伺之通敲可被申付候」此金藏源助儀往來人懷中之品盜取候段不届ニ付敲可申付候哉」此友七儀伺之通輕追放申付朱書之通平七儀者急度叱リ置可被申候」此友七儀先達而も盗いたし候付堺奉行所ニおゐて及吟味入墨之上重敲申付候身分ニ而居所も不存候喜ハ被頼世話料取候儀ニ者無之候得共出所不糺之品賣拂之世話引受其上御構之場所に立入候段旁不届ニ付輕追放可申付候哉

第七十一判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明五年の分收録)

盜賊三人并盜物取受賣拂遣候もの「御仕置窺書」(中略)「右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」巳四月「小田切土佐守」御城代附部能登守殿御附札「此兵藏儀伺之通入墨之上重敲申付朱書之通庄兵衛儀急度叱置可被申候」黃紙「此兵藏儀町家表之戸明掛リ有之内に入又ハ所々髮結床入口ニ有之品往來之女差居候かんさしかうかい等盗いたし其上無宿伊三郎も盜物引受賣拂遣候段旁不届ニ付入墨之上重敲可申付候哉」此伊三郎儀伺之通重敲可被申付候「同紙○黃」此伊三郎儀往來之女差居候かんさし盜取其上無宿源藏も盜物引受賣拂之世話いたし候段旁不届ニ付重敲可申付候哉「此源藏儀伺之通敲可被申付候」同紙○黃「此源藏儀往來之女差居候かんさし盜取候段不届ニ付敲可申付候哉」此彌兵衛儀存命ニ候ハ伺之通入墨敲可申付ものニ候段一件之者に可被申渡候「同紙○黃」此彌兵衛儀兵藏伊三郎源藏より盜物引受賣拂之世話いたし配分取候段不届ニ付入墨之上敲可申付候哉

第七十二判決例

(諸吟味窺書寫「天明五年の分收録」)

強盜并引合之者「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候(中略)「右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」巳四月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「此平吉儀伺之通獄門可被申付候」黃紙「此平吉儀先達而も於南都盗いたし候付入墨之上大和國中拂ニ相成候身分ニ而又候百姓家表之戸并土藏之戸こち明内に入剩寺内村ニ而者起合候ものを可殺旨申威候段強盜之仕方重ニ不届至極ニ付獄門可申付候哉」此伊兵衛儀伺之通死罪可被申付候「此伊兵衛儀宇八新吉申合所々町家表之戸明掛有之内に

入又ハ戸をこち明這入其外寺院之塀を越盜いたし既右寺院并橋通四丁目ニ而者宇八頭取起合候ものを可殺旨申威又ハ脇差を抜相威候始末強盜之至剩同類之者及吟味候節一旦逃去候上名前を替市中ニ致住居候段公儀を不恐仕方重々不届至極ニ付死罪可申付候哉此九兵衛儀伺之通過料三貫文可被申付候此九兵衛儀借屋貸渡候ハ早速家請人を取身元得與相糾置可申處無其儀等閑之取斗不埒ニ付過料三貫文可申付候哉

第七十三判決例 (諸吟味窺書寫) 天明五年の分收録)

強盜并盜賊六人盜取候品引受賣拂遺候もの古手仲間定法相背盜物と乍承品數買請殊古銅道具仲間不加右類賣拂候もの御仕置窺書一書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候(略中)右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上御城代阿部能登守殿御附札此伊兵衛次郎吉文七大吉儀伺之通大坂三郷町中引廻之上獄門可被申付候黃紙此伊兵衛次郎吉文七大吉儀行衛不知利八三五郎申合度町家に忍入又ハ表之戸明掛リ在之内に入并見世先之盜をもいたし大吉儀者次兵衛藤八行衛不知與市共申合町家土藏に忍入或戸明掛リ有之内に入盜いたし剩南本町壹丁目ニ而ハ伊兵衛次郎吉三五郎頭取大川町ニ而ハ伊兵衛頭取中筋町ニ而ハ文七次郎吉頭取新淡路町江戸堀三丁目ニ而ハ次郎吉頭取齋藤町ニ而ハ次郎吉頭取脇差を抜起合候ものを可殺旨申威シ既大吉儀ハ齋藤町ニ而起合候ものに手疵負せ候段重々強盜之仕形不届至極ニ付四人共大坂三郷町中引廻之上獄門可申付候哉此藤兵衛儀伺之通死罪可被申付候同紙○黃此次兵衛儀先達而致盜候付入墨之上重敵申付候身分ニ而又候大吉利八三五郎與市等申合町家表之戸明掛リ在之内に入或ハ裏口之

戸建寄有之を引明ケ又ハ土藏忍入盜いたし候段不届至極に付死罪可申付候哉」(中)「此喜八儀伺之通諸色取上輕追放申付損失之儀者朱書之通可被申付候」同○紙黃此喜八儀徳用ニ迷ひ古手仲間定法相背無宿者共々盜ものと乍承品數買受殊ニ古銅道具仲間ニも不加右類之品迄賣捌候段旁不届ニ付諸色取上輕追放可申付候哉」(下略)

第七十四例決例 (諸吟味竊書寫「天明五年の分收録」)

盜賊并引合之者共御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」(中)右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉伺候以上」巳四月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此勘右衛門儀伺之通敲申付朱書之通ゆか儀急度叱リ置可被申候」黃紙」此勘右衛門儀同村儀助納屋入口ニ有之品盜取候段不届に付敲可申付候哉」此勘助徳兵衛儀伺之通過料五メ文つゝ可被申付候」同○紙黃「此勘助徳兵衛儀勘右衛門盜いたし候様子承リ候ハ訴出可申處無其儀内證ニ而差返候心得ニ而所之者にも相包居候段不埒ニ付過料五貫文宛可申付候哉

第七十五判決例 (諸吟味竊書寫「天明五年の分收録」)

盜賊貳人」御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」(中)右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」巳二月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此忠兵衛儀忠助願之通御仕置有恕申付大坂三郷ニ罷在間鋪旨申渡たみ儀急度叱置過料償等之儀朱書之通り可被申付候」黃紙」此忠兵衛儀

雇主已之助方ニ而手元ニ有之品盜取既口ニ而銀高之盜ニ相成不届至極ニ付死罪可申付候哉之段可相伺候處已之助代判忠助儀此者ハ幼少方召仕暇遣候後も相雇候處是迄實弊ニ相勤候間全出來心與不便ニ存其上盜取候品も相揃候上ハ無申分由ニ而御仕置宥恕相願候付大坂三郷ニ罷在間敷旨可申渡候哉」此仁兵衛儀伺之通入墨之上重敲申付過料償損失等之儀朱書之通可被申付候」同○黄紙「此仁兵衛儀町家表之戸明掛有之内に入又ハ軒下ニ有之品盜取候段旁不届ニ付入墨之上重敲可申付候哉

第七十六判決例 (諸吟味窺書寫「天明五年の分收録」)

盜賊三人「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」已二月十八日「小田切土佐守」(中略)「御城代阿部能登守殿御附札」此太兵衛儀伺之通入墨之上重敲申付過料并質代銀償等之儀ハ朱書之通可被申付候」黄紙「此太兵衛儀町家表之戸明掛有之内に入又者店先ニ有之品盜いたし候段不届ニ付入墨之上重敲可申付候哉」(下略)

第七十七判決例 (諸吟味窺書寫「天明五年の分收録」)

盜賊三人并怪敷心付候品預り置候も」の御仕置窺書(中略)「右之者共御仕置黄紙下札を以奉窺候以上」已十二月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「此喜助さよ儀伺之通喜助ハ入墨之上重敲さよ儀は大坂三郷拂申付過料償損失等之儀ハ朱書之通リ申付松之助儀過料難差出旨申候ハ、三十日手鎖可被申付候」黄紙「此喜助さよ儀喜助儀ハ先達而盜いたし候付敲申付置候處此もの共并行衛不知藤吉申合寺院表之戸明掛

リ有之内に入盜いたしさよ儀は外ニも行衛不知市利助音松源兵衛等追々申合所々百姓家人口明掛リ有之内に入又ハ壹人ニ而も百姓家人口ニ有之品盜いたし其上藤兵衛并行衛不知吉兵衛藤ハも盜物引請賣拂又ハ質入之世話いたし候段旁不届ニ付喜助者入墨之上重敲申付さよ茂同様可申付處女之儀ニ付大坂三郷拂可申付候哉」(下略)

第七十八判決例

〔諸吟味竊書寫〕天明六年の分收録)

強盜并同類之もの「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉存候」(中略)右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上「午五月」小田切土佐守「御城代阿部能登守殿御附札」此利兵衛長七喜八儀伺之通利兵衛長七者大坂三郷町中引廻之上三人とも獄門申付其外者可爲朱書之通候「黃紙」此利兵衛長七喜八儀源藏信濃奴の藤吉五郎并六等追々申合所々百姓家町家等に忍入或ハ入口之戸明掛リ有之内に入致盜剩富田林村ニ而ハ利兵衛儀捕掛リ候ものを脇差ニ而突殺上福嶋村ニ而ハ長七儀捕掛リ候者に荷ひ棒ニ而疵付大保村北余部村ニ而ハ此者共頭取町名不存町家ニ而ハ利兵衛長七五郎頭取農人橋材木町北屋町壹丁目釣鐘上之町濱町南久寶寺町壹丁目尾張坂町岩屋町ニ而ハ利兵衛并同類喜兵衛與三兵衛藤吉五兵衛小次郎等追々頭取脇差を拔或ハ寢入居候女を手込いたし聲立候ハ可殺旨申威盜いたし候始末強盜之仕方其上利兵衛長七儀者度々之忍入ニ而重々不届至極ニ付利兵衛長七ハ大坂三郷町中引廻之上三人共獄門可申付候哉」此源藏儀伺之通死罪可被申付候」同○黃紙「此源藏儀三人之者と申合百姓家に忍入剩同類三人とも脇差

を、拔起合候ものを、可殺旨申おとし候節、俱々携盜いたし候段、不届至極ニ付、死罪可申付候哉」

第七十九判決例 (諸吟味窺書寫「天明七年の分收録」)

來八月十一日下同月廿七日落着「強盜拾壹人并引合之者又ハ出所不糺之品引受賣拂之世話いたし候もの」御仕置窺書」(中略)「同日入牢無宿千代松未拾八歳」此者先達而盜仕候付五年以前卯年八月廿三日入牢同十月

十八日敲可申付處幼少ニ付非人手下ニ申付候處又候盜仕候付同年十二月十三日入牢四年以前辰年閏正月十三日入墨申付候處又候不届有之去年四月十三日入牢同年七月廿七日敲之上重追放申付候者ニ御座候(朱書)「

(略中)「右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」未六月「小田切土佐守」御城代堀田相模守殿御附札「此清兵衛千代松吉兵衛清次郎儀伺之通四人共大坂三郷町中引廻シ之上清兵衛千代松吉兵衛獄門清次郎は死罪可被申付候」黃紙「此清兵衛千代松吉兵衛清次郎儀追々申合所々町家入口之戸をこち明忍び入盜いたし又ハ往來之女差居候かんさしを拔取剩大寶寺町常珍町ニ而ハ清兵衛千代松吉兵衛三人頭取脇差を拔起合候者を可殺旨申威シ難波御堂前ニ而も往來之者を取卷清兵衛吉兵衛頭取脇差を拔相威追剗同前之盜いたし候段旁強盜之仕方其上一同度々之忍び入ニ而重々不届至極ニ付四人共大坂三郷町中引廻シ之上清兵衛千代松吉兵衛獄門清次郎は死罪可申付候哉」(下略)

第八十判決例 (諸吟味窺書寫「天明七年の分收録」)

未八月十一日下同月廿三日落着「盜賊三人并出所不糺之品引請賣拂之世話いたし又者途中持遣シ其上乍聊大坂奉行所刑事判決例三十七題

盜取候品と不心付貰請候者」御仕置窺書「未八月廿三日」小田切土佐守「右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」未五月「小田切土佐守」御城代堀田相模守殿御附札「此次兵衛儀敲之上大坂三郷拂可被申付候」黃紙「此次兵衛儀先達而盜いたし候」付入墨之上重敲申付候身分を不顧利ハハ世話料貰受候儀ニハ無之候得共出所不糺之品引受賣拂之世話いたし又者途中持歩行遣シ其上聊之品ながら履もの損シ候迎利ハ盜取候品與不心付草履貰請候段旁不届ニ付輕追放可申付候哉」此清吉儀存命ニ候ハ、伺之通入墨之上重敲可申付者ニ候段一件之者共に可被申渡候」黃紙「此清吉儀盜可仕與長藏住吉申合町家表之戸明懸リ有之内に入同類之者衣類持出候節表ニ心を付罷在候段不届ニ付入墨之上重敲可申付候哉」此庄兵衛儀伺之通敲可被申付候」同○黃紙「此庄兵衛儀百姓家入口ニ有之品又者道端ニ作付有之植木等盜取候段旁不届ニ付敲可申付候哉

第八十一判決例 (諸吟味窺書寫「天明三年の分收錄」)

盜賊五人「御仕置窺書」王屋駿河守「(中略)」此字八儀伺之通大坂三郷罷在間敷旨可被申渡候(御城代戸田因幡守御附札)「此字八儀庄兵衛方ニ相勤居候内手元之衣類盜取候段不届ニ付入墨敲可相伺處被盜主庄兵衛儀卯八は先達而召仕候者之儀不便ニ存候殊被盜候衣類は品并代銀に而相揃候上は旁卯八に對無申分旨御仕置宥免之儀相願候間大坂三郷ニ罷在間敷旨可申渡哉

以上多數の判決例に依つて、大坂地方に行はれたる、近世中葉時代の盜犯に關する刑事制度、甚だ詳密なりし

ことを知り得るのである。

「公事方御定書」に於ても、盜犯規律の法條は、最も詳細なるものゝ一つである。即ち（贓物に關するものは除いて）、その下卷第五十六條『盜人御仕置之事』（〔徳川禁令考〔後案〕第三帙三〇一頁〕）の條の第一項乃至第十一項、第十三項乃至第二十一項、第二十七項乃至第三十項及び第四十三條『欠落奉公人御仕置之事』（〔徳川禁令考〔後案〕第二帙七一頁〕）の條の第一項乃至第三項等がそれである。

扱て、甚だ繁雜に亘る嫌があるので、こゝでは、右判決の要旨及び御定書の法文の掲記對照は差し控へるが、此方面の大坂の制度と御定書上の原則とは、相似たるもの少くないが、全部同一であるとは云へないこと確かである。又殊に強盜者の家主過料三貫文制（〔第七十三〕）とか、盜見張犯入墨重敲制（〔第八十〕）（〔徳川禁令考〔後案〕第三帙三〕）の如き、御定書には類似の條項も見出し得ないのであるが、しかし尙ほ、大坂盜犯刑法と「公事方御定書」の此方面の原則との主旨大綱に至つては、兩者異なる所なしと云ふこと、充分可能であると思はれる。

贓物に關する罪

（一）徳川時代に於ても、贓物の保管或は處分等に關與せる者は處罰せられた。先づ關係判例に就いて、近世中葉に於ける、大坂方の此原則を窺つて見よう。

第八十二判決例（「諸吟味寃書寫」天明五年の分收録）

大坂奉行所刑事判決例三十七題

盜賊拾貳人并引合之者共一件」御仕置窺書」(中略)「右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉伺候以上」巳六月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」(中略)「此德兵衛儀伺之通古手株取放所拂可被申付候」同紙○黃此德兵衛儀古手仲ケ間定法相背買取候代口物色品をも委ハ帳面ニ不相記賣買いたし其上藤兵衛買合候由ニ而賣渡候代口もの怪敷品ニも可有之哉と乍心付其儘買請取替銀錢ニ差引いたし賣捌候段不届ニ御座候得共余斗之賣德取可申欲心を以代銀下直ニ買受候筋ニ者不相聞既盜賊共ハ手を越買取候儀ニ付古手株取放所拂可申付候哉

第八十三判決例 (諸吟味窺書寫) 天明五年の分收録)

入墨敲申付候身分ニ而盜物ニも可有之與心付候品持歩行候者并出所不糺之品賣拂之世話いたし又候盜物ニも可有之與心付候品賣拂遣候もの「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰付奉畏候」(中略)右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」巳二月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此源次郎儀伺之通敲之上重追放可被申付候」黃紙」此源次郎儀住所も得與不存候道連之者任申荷物持遣右之もの見失ひ候後盜物ニも可有之哉與乍心付其儘致所持右荷物之内ニ有之金子を横道ニ遣込候段先達而入墨敲申付候身分ニ而ハ別而不届ニ付敲之上重追放可申付候哉」此吉兵衛儀伺之通輕追放可被申付候」此吉兵衛儀先達而盜いたし入墨之上重敲申付候身分にて盜物與不存伊兵衛相頼候品出所も不相糺引請賣拂之致世話候段世話料取候儀ニ者無之候得共不届ニ付輕追放可申付候哉」此宗兵衛儀伺之通敲申付朱書之通七兵衛急度叱

リ之上、買請候代錢損失可被申付候」此、宗兵衛儀、吉兵衛持參之品、盜物ニモ可有之哉と心付候ハ、引請申間敷處無儀、右品賣拂之世話仕候段、不届ニ付、敲可申付候哉

此二判決並に既掲後出諸判例に依つて、贓物故買（第七十三、第^{八十二}判決例）、贓物受託（惡意）（第八十三、^{第八十一}判決例）、贓物賣却周旋

（善意、惡意）（同）、贓物質入幹旋、贓物賣却（第八十五、^{第六十六、第七十一}判決例）、盜物質入賣却幹旋（第六十六、^{第七十一}判決例）等皆犯行であ

り、處罰せられたことが判明する。その刑罰の詳細は、各判例に譲るが、所拂、追放、敲等がその刑種である

（尤もそれは他の條件及び他の犯罪の併存する場合のものが多いのであるが）。

以上、大坂に於ける贓物犯の態様の概要を示すものと思はれるが、更に『出所不相糺』品の取引に關與する行為又犯罪であり、而してそれは少くとも贓物取引防止をその目的の一つとせる制度であると考へられるので、ここに此問題に言及して置き度い。尙ほ此種原則を窺ふべき大坂判決としては、既に掲げたものもある（第六十六、^{第七十六}判決例）し、又後出（第八十五、^{第七十六}判決例）もするのであるが、こゝにも一例を掲げるならば、

第八十四判決例（諸吟味窺書寫）天明六年の分收録）

盜賊三人出所不相糺之品引受候者并仲間定法相背紛敷品買受又ハ預リ置或ハ組合ニ不入古手買賣いたし候もの「御仕置窺書」^{（中略）}「右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」午六月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札^{（中略）}「此佐助儀伺之通諸色取上ヶ輕追放申付其外可爲朱書之通候」同^{○黃紙}「此佐助儀欲心ニ拘り仲間定法相背無宿もの、出所紛敷品買請又ハ居所をも不存候もの致持參候衣類をも是又出所不相

糺買受候積ニ而手付金を渡シ品預リ置候段旁不届ニ付諸色取上輕追放可申付候哉」(下略)
「公事方御定書」下卷第五十六條『盜人御仕置之事』(徳川禁令考後案第三帙三〇頁)の條の第二十二項乃至第二十六項及び第三十一項

寛保元年極

一 盜物と乍存世話いたし配分ハ不取もの

敲

同

一 盜物と存預り候もの

敲

同

一 陰物買

入墨之上
敲

但年來此事ニかゝり居候ものハ死罪

従前々之例

一 陰物と乍存又買いたし候もの

入墨之上
敲

同

一 盜物とハ不存候得共出所不相糺質に置遣候もの

過

料

追加

延享四年極

但武家之家來ニ候ハ、江戸拂

追加
寛保三年極

一 盜物と乍存下直ニ買受候もの

所 拂

なる、贓物其他出所不糺明品取引處罰の原則と、前記の如き大坂の此方面の法則と、之又全然同一とは云へないが、その大綱その概要に於て、兩者同じと云ふことは出来ると思はれる。

(二) 次なる三判決例は、贓物に關する制度を徴する判例であると共に、「公事方御定書」下巻第五十七條「盜物質ニ取又ハ買取候者御仕置之事」(「徳川禁令考」後集)の條の第五項

従前々之例

一 組合之定有之商物組合に不入商賣いたし候もの

商物販上
過

料

なる原則又、大坂に行はれたことを証示するものである(第六十九、第七十三判決例参照)。

第八十五判決例 (「諸吟味窺書寫」天明五年の分收録)

盜賊三人出所不糺之品質入之世話いたし又ハ無株ニ而古金賣買いたし并御構之者立入候一件「御仕置窺書」(中略)「右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」(「巨十月」小田切土佐守)「御城代阿部能登守殿御附札」此宗吉儀伺之通入墨敲申付過料價等之儀朱書之通可被申付候「黃紙」此宗吉儀所々呉服屋古手屋見世ニ而手元之品盜取其上同類徳兵衛も盜物引請質入之世話いたし候段不届ニ付入墨敲可申付候哉「此彌兵衛儀伺之通死罪可被申付候」此彌兵衛儀先達而盜いたし候付入墨之上重敲申付猶又出所不糺之品賣拂之世話い

たし候付輕追放申付候身分ニ而御構之場所に立入所々寺社境内并吳服屋見世等ニ而盜いたし且嘉兵衛申合候而も寺院境内之品盜取候段旁不届至極ニ付死罪可申付候哉」此彌吉儀伺之通輕追放申付損失償等之儀朱書之通可被申付候」此彌吉儀先達而盜いたし候付入墨之上重敲申付候身分ニ而世話料等取候儀者無之候得共質判組惣吉ガ質ニ入候品并同人彌兵衛兩人ガ引請質ニ入遣候品出所も不糺置其上質判組之者無宿ニ相成候儀も不存居候段旁不届に付輕追放可申付候哉」此嘉兵衛儀伺之通重敲可被申付候」此嘉兵衛儀宗吉ガ源兵衛引請質ニ入遣候品同人任申出所も不糺質置主ニ相成遣且彌兵衛御構有之もの與申儀も不存折々立入致させ同人申合寺院境内ニ有之品盜取又ハ同人盜取候品をも引請賣拂遣候段旁不届ニ付重敲可申付候哉」此吉三郎儀伺之通商物取上過料錢三貫文可被申付候」此吉三郎儀無株ニ而古金賣買いたし候段不届ニ付商物取上候上過料錢三貫文可申付候哉」(略)(下)

第八十六判決例 (諸吟味窺書寫「天明五年の分收録」)

盜賊三人出所不糺之品賣拂之世話いたし又ハ無株ニ而古手商賣いたし盜物引受候者并引合之者一件」御仕置窺書」(中)「右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉伺候以上」巳四月小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此字兵衛儀伺之通商物取上入墨敲申付朱書ハ藤助損失ニ可被申付候」黃紙」此字兵衛儀無株ニ而古手商賣いたし其上盜物引受賣捌候段不届ニ付商物取上入墨敲可申付候哉」此久兵衛儀伺之通過料三貫文可被申付候」此久兵衛儀字兵衛を世話いたしかしや借り受遣候ハ、身元得と相糺置可申處無其儀不念ニ付過

料三貫文可申付候哉」此清八吉兵衛喜八儀伺之通入墨之上重敵可被申付候」此清八吉兵衛喜八百姓家土藏之壁崩掛リ有之内に入同類平三郎盗いたし候節一門外ニ罷在俱々盗いたし候段不届ニ付入墨之上重敵可申付候哉」此和助儀伺之通輕追放可被申付候」此和助儀先達而盗いたし候ニ付入墨敵申付候身分ニ而無宿者ハ被頼出所不糺之品引請賣拂之世話いたし候段^(以上二)不届ニ付輕追放可申付候哉」
(字重出)

第八十七判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明七年の分收錄)

未八月十一日下同月廿三日落着」九州者ニ似々疊表賣歩行代銀廻リ合無之者ハ衣類と引替押賣同前之儀いたし候もの御仕置窺書^(中)」右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」未六月」小田切土佐守」御城代堀田相模守殿御附札」此又四郎新七長兵衛惣吉儀伺之通過料拾貫文宛可被申付候」此又四郎新七長兵衛惣吉儀たとへ疊表賣代銀之替リニ貫請候儀ニ候共衣類之直打を考疊表員數も夫相應ニ相渡置右衣類を又賣拂候上者古手賣買も同前之儀ニ候所右株組合ニ不入容易ニ渡世いたし其上銘々九州者之躰ニ似セ衣類言葉等迄取鎔疊表賣歩行代銀廻リ合無之者ハ衣類と引替達而相勸々賣渡候始末押賣同前之儀旁不埒ニ付過料拾貫文宛可申付候哉

幼年者婦女特別處遇制

第八十八判決例

〔諸吟味窺書寫〕天明六年の分收錄)

盜賊五人怪敷品と乍心付預リ置煮賣商いたし并盜物引受右盜賊を宿いたし古手仲ヶ間定法相背又ハ盜物ニも可有之哉と心付候品預リ置候者」御仕置窺書」(中)「午四月十三日入牢無宿千代松午拾七歳」此者先達而盜仕候付四年以前卯年八月廿三日入牢同十月十八日敲可申付處幼少ニ付非人手下ニ申付候處又候途中之盜仕候付同年十二月十三日入牢三年以前辰正月十三日入墨申付候ものニ御座候(朱)(下)(略)

第八十九判決例 (諸吟味窺書寫) 天明三年の分收錄)

途中ニ而取逃仕候者一件」御仕置窺書」土屋駿河守」卯正月十六日入牢無宿與市、卯、拾、四、歳」(中)此與市儀幼少之者ニ付非人手下可被申付候(御城代戸田因幡守御附札)「黃紙」此與市儀袖乞之女乞請候品を持送遣候途中ニ而取逃いたし候段不届ニ付入墨敲可相伺處幼少之者ニ御座候間小屋ニ差置十五歳ニ相成候上敲可申付哉」此源七儀伺之通於小屋三十日手鎖可被申付候」同○黃紙「此源七儀女房とめ所持之品取逃いたし候與市を見逢連來候處不訴出遣捨候品々之代リ同人着用之布子帶を受取内分ニ而相濟候段不埒ニ付三十日押込可相伺處無宿之儀ニ付於小屋三十日手鎖可申付哉

右の幼少盜人非人手下の判決例(第七十九判例)は、「公事方御定書」下卷第七十九條『拾五歳以下之者御仕置之事』

(徳川禁令考「後聚」)
(第四軌一〇六頁)の條第四項

寛保二年極

一拾五歳以下之無宿者途中其外にて小盜いたし候におゐてハ

非人手下

の原則が、大坂にも行はれたことを示すものである。

尙ほ、少くとも大坂にては、近世中葉、更に場合に依り、若年の故を以て用捨せられることがあつた。即ち

第九十判決例 「吟味御用落着書」一收録

相使瀬田専右衛門「小濱周防守殿御掛(朱書)」一去ル四日之夜難波町出火之節西番所爲火元見早人足頭山

城屋嘉介方ニ抱置候小仕惣七を差遣火元見屈罷歸候御堂筋群集いたし候故聲を懸ケ拂除ケ候得ハ立賣堀

三丁目炭屋惣右衛門かしや堀正格弟子金吾并下人忠七義右場所通り懸リ押倒され候由を申懸ケ金吾義惣七

目之上を棒ニ而擲候處立賣堀五丁目伊丹屋喜右衛門家守伊丹屋伊兵衛義揆摺ニ入候を幸ニ金吾忠七義逃去

リ候旨伊兵衛を召連レ歸候ニ付相手三人所預ケ申付置一件遂吟味候上落着申渡覺」堀正格弟子金吾」其方

義下人忠七同道ニ而南久寶寺町五丁目小西六右衛門方へ火事見舞ニ罷越西番所爲差出候火元見惣七を打擲

いたし尤群集之中押倒され候を不埒ニ存何之無弁も右之仕合伊丹屋伊兵衛揆摺ニ入候を幸逃去リ候旨雖申

之物七義御用焼灯も持居候へハ其義不心付義者在之間敷處重高之仕形不埒ニ付急度可申付候へ共若年之其

方前後無思慮趣ニ相聞ニ付此度ハ令用捨預ケ差免候間向後右躰之義無之様可相愼候」(下略)

更に又、大坂に於ては、女の故を以て、刑罰輕減の處置が採られたことがある。即ち前出第四十六判決例に、

盜の爲め敲申付くべき所『女之儀ニ付三十日手鎖可申付候』又第七十七判決例に、贓物犯の爲め入墨重敲申付へ

き所、『女之儀ニ付大坂三郷拂可申付』きものとなせるなどその例證である(第九十一判例參照)。

「關所」制

刑事制度としての財物沒收制度に就いて〔拙文「徳川幕府「過料刑」小考」、「國家學論集」所收、參照〕、「公事方御定書」はその一般原則を、第二十七條、第九十六條、第三百三條等に規定して居るが、就中第二十七條『御仕置成候者關所之事』〔徳川禁令考〕後案第二六頁の條の第一項但書中の、

專利欲ニ拘り候類者江戸拾里四方追放并所拂にても田畑家屋敷關所申付へし食たる儀無之におゐてハ不及關所

と宗旨の原則が、大坂にも行はれたこと、次の判例に徴して之を知ることが出来るであらう〔尙ほ前出第八十四、第八十八判決例參照〕。

第九十一判決例 〔吟味御用落着書〕一收録〕

寛延元辰年十二月落着「相使小泉伊左衛門」富嶋貳丁目大黒屋利助かし家鹽屋松三郎同家親藤右衛門儀難船掛り合之儀ニ付不屈有之先達而牢舍申付松三郎家内之者共并諸色等ハ所に預ケ置候處其以前安治川北貳丁目長濱屋仁兵衛月正嶋材木置場日向屋市太郎右兩人ハ廻船貳艘松三郎方へ質物ニ取置候を預ケ之内藤右衛門母ひさ取斗ニ而右貳艘共船主へ差戻し質物銀請取候上所ニ取隠し置候趣當八月藤右衛門御仕置申付以後不埒之筋相聞に候ニ付右ニ携候者共入牢所預ケ等ニ申付置一件遂吟味酒井讃岐守殿へ相親候上落着申渡覺」所預ケ渡邊民部御代官所攝州西成郡今宮村百姓又右衛門同家伯母ひさ」其方儀孫松三郎同家ニ罷在

候節所預ケニ申付置候處預ケ之内橋通七丁目鹽屋勘兵衛瓢單町松屋七兵衛方へ我儘ニ出歩行其上松三郎方に質物ニ取置候廻船貳艘共當三月四月兩度ニ船主共へ差戻し質銀請取橋通八丁目灘屋嘉兵衛戎嶋町西國屋佐兵衛方へ取隠し置候段不埒ニ付急度咎をも可申付處右船質證文ハ悴藤右衛門不及吟味ニ已前々其方へ貰置候故無何心右之仕方ニ候之由申之畢竟女之儀無思慮趣ニ相聞ニ付諸色無構大坂三郷拂申付候」辰八月廿七日入牢橋通七丁目播磨屋七兵衛かしや鹽屋勘兵衛」其方儀ひさゝ銀子預ケ方之儀頼候共松三郎ひさ義ハ所預ケニ茂申付置候者ニ候得は致得心間錦義ニ候處彼は世話致シ其上長濱屋仁兵衛ハ松三郎方へ質物ニ入置候廻船橋通八丁目葭屋清左衛門方へ買請ケさせ船代三貫五百目之内七百目仁兵衛方ハ借り請候段全自欲に拘り候仕形重々不埒ニ付諸色闕所ニ取上ケ大坂三郷拂申付候」辰八月廿七日入牢瓢單町瓶子屋甚右衛門かしや松屋熊之助同祖父松屋七兵衛」其方儀ひさ緣者之事ニ候得共松三郎ひさ義ハ所預ケニ茂申付置候者ニ候得は銀子預ケ方之儀頼候共異見を加へ差留メ可申筈之處無其儀長濱屋仁兵衛ハひさ方へ請取候質銀壹貫九百五十拾目灘屋嘉兵衛方へ預ケ遣其後右銀高之内貳百五十拾目自分入用ニ取遣イ其上日向屋市太郎ハ松三郎方へ質物に入置候廻船西國屋佐兵衛任望ニ市太郎親庄右衛門と相談之上佐兵衛方へ賣拂セ候段全自欲ニ抱り候仕形重々不埒ニ付諸色闕所ニ取上ケ攝河兩國拂申付候」辰十二月廿二日入牢戎嶋町萬屋伊兵衛かしや西國屋佐兵衛」其方儀松三郎ひさ所預ケ之儀乍存日向屋市太郎より松三郎方へ質物ニ差入置候廻船市太郎親庄右衛門并松屋七兵衛迄及相談ニ船代銀纔四百三十拾目ニ買請ケひさ方へ可相渡三百拾八匁之銀子ハ預リ銀

「いたし置右廻船修理を加へ候上無間茂橋通五丁目紀伊國屋庄兵衛方へ銀壹貫貳百目ニ賣拂候段全ク船代銀徳用を見込買請候義と相聞へ重く不埒之仕方ニ付諸色關所ニ取上ケ大坂三郷拂申付候」(略)

又御定書下卷第九十六條「御仕置ニ成候者關所田畑を押隠候もの咎之事」(「徳川禁令考」後聚)の條の、

寛保四年
延享二年極

一 關所ニ可成田畑地面押隠におゐては

名 主
組 輕 追 放
所 頭 拂

なる原則亦、大坂の原則でもあつたらしいことは推測に難くない(「徳川禁令考」後聚第(四帙三二二頁參照))。次の判例又、此推測に

役立つものであらう。

第九十二判決例 (「諸吟味寘書寫」天明三年の分收録)

家内改家財之内取除置候一件「御仕置寘書」土屋駿河守「別紙帳を以御仕置相伺候博突一件之内天満信保町河内屋又右衛門借屋毛馬屋治右衛門儀召捕候節家内爲改佐野備後守私兩組同心善遣諸式爲付立同家ニ罷在候もの共は所之者に預申付置候處右家内改ニ遣候以前諸式之内取除置候趣此節相聞候付治右衛門妻こゝ并引合之者共吟味仕候趣左之通ニ御座候」所預天満信保町河内屋又右衛門かし屋毛馬屋治右衛門妻こゝ寅三十八歳」右こゝ儀夫次右衛門并幼少之忤次郎吉娘まん與四人相暮罷在當九月二日治右衛門儀致他行候(「原重出誤」處於途中被召捕候由名所不存次右衛門知人之由追こゝう方に罷越相知吳候付驚入如何躰之惡事仕候

哉無覺束如何可仕與當惑仕候處相知セ吳候者共用事も有之候ハ、承度旨申之四五人程居殘介抱等いたし吳候内右之者共申候は治右衛門儀右之仕合ニ候得は定而家内諸式等改可有之も難斗旨咄合居候付左候而は治右衛門身上不如意之儀而凌方無之ニ付家財之内取除置賣拂候而成共可相凌與不斗存付右寄合居候者共相頼家内ニ有之候佛檀壹箆壹棹梯子壹膳棚壹戸棚壹組右何茂内ニ着類其外品々入置候儘ニ而北隣之明屋に竊ニ取除置候處」右治右衛門妻方に知セニ罷越諸式取除遣候者與も名所相知不申治右衛門博奕場ニ而出會候者與相聞平生治右衛門居宅に立入候ものニは無御座候付こう儀も不存段無相違相聞申候^(朱書)」同日四兩組同心家内改ニ罷越其節家主又右衛門儀は病氣ニ付爲名代同借屋播磨屋治兵衛罷出案内いたし候付最前取除置候諸式之儀は彌相包改を受候處此者并悴娘共所之者に預ニ成丁内々番人付添居候付前書之様子可申出様も無之其儘罷過候内猶又吟味ニ成候事之由右次右衛門被捕候以後此者方に寄合候者共は實々名前も不存咄合候儀を承りふ斗存付儀ニ而右之内申教候者等曾而無之旨申之候得共右躰夫治右衛門被捕候付家内改可有之哉與存量家財之内取除置候段吟味之上無申披誤入候旨申之候」同借屋播磨屋治兵衛寅三十七歳」右治兵衛儀治右衛門家内改之節家主又右衛門病氣ニ付名代ニ被頼案内いたし候處其砌こう儀家財之内取除置候儀不心付罷在候由申之候得共右躰治右衛門家内改之節家主又右衛門爲名代乍罷出治右衛門家財こう取除置候儀不心付候段吟味之上無申披誤入候旨申之候」右河内屋又右衛門寅五拾壹才」右又右衛門家内改之節病氣ニ付爲名代治兵衛を相頼隨分入念候様申^(含か)差出候處其以前こう儀家財之内同借家北隣明家に取除置

改を受候段吟味之上承驚入候由此者儀久々病氣に付家内改之後も借屋内見廻り相怠右明屋ニ品々取除有之儀不存罷在候旨申之候得共右躰治右衛門家内改之節同人妻こう儀明借屋に家財取除置候儀不存罷在候段吟味之上無申披誤入候旨申之候」右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」寅十二月「土屋駿河守」御城代戸田因幡守殿御附札卯二月八日下ル同十六日落着」此こう儀伺之通居町拂可被申付候」此こう儀夫治右衛門被_レ捕候付家内改可有之哉與存量家財之内取除置候段不_レ埒ニ付居町拂可申付候（哉）」此治兵衛儀伺之通急度叱リ置可被申候」此治兵衛儀治右衛門家内改之節家主又右衛門爲名代乍差出治右衛門家財こう取除置候儀不心付候段不念ニ付急度叱リ置可申哉」此又右衛門儀伺之通叱リ置可被申候」此又右衛門儀治右衛門家内改之節同人妻こう儀明借屋に家財取除置候儀不存罷在候段不念に付叱リ置可申哉

裁判及び行刑に關する雜則

(一) 當時、裁判所より回付の訴狀（裏判）の受領を拒んだり、或は呼出狀（差紙）に應じない者は處罰せられた。

「公事方御定書」下卷第十九條『裁許裏判不請もの御仕置之事』（「徳川禁令考」後（聚第二帙二二頁））の條の第二項

同○從前
々々之例

一裏判并差紙不請もの

所

拂

は、此原則を規定せるものである。此原則は、大坂の原則でもあつたか。次なる判決に徴する限り、殆んど同様の原則が、大坂にも行はれたことを知るのである。

第九十三判決例（吟味御用落着書「一收録」）

相使吉田源太左衛門「周防守殿御掛^{（朱書）}」建部丹波守領分播州揖東郡林田米屋彦次郎義千種清右衛門萩原藤七郎入組御代官所同國赤穂郡森村大庄屋弁右衛門并同郡拾六ヶ村庄屋年寄組頭百姓以上貳拾壹人之者に預米出入ニ付當六月廿七日願出兩奉行裏印差出候處先訴有之杯と申訴狀不請取旨願人斷出ニ付清右衛門藤七郎に申達シ相手方呼出候處右出訴之様子相手共には不申聞弁右衛門兄重作一存ニ而訴狀差返候由段々仕方不埒ニ相聞候ニ付重作義は入牢申付其外之もの共ハ所預ケ申付置一件遂吟味酒井讃岐守殿に相伺候上落着申渡覺」森村大庄屋弁右衛門同家兄重作」其方儀奉行所へ遣候訴狀を殘ル貳拾人之相手共へも不申聞我儘ニ差返相手方一統ニ呼登セ候節も其方壹人罷出申分ケ可致由ニ而殘者共差留置候義は弟弁右衛門負イ銀も有之殊當時村用ニ而江戸表に下り居候故其方身分ニ引請弁右衛門先訴出入相濟候迄此度之願差延させ度存候迄ニ而強而工之筋とハ不相聞候得共一存ニ取斗候段奉行所を不憚仕方不届ニ付居村拂申付候」森村百姓惣代七兵衛」同村組頭新九郎」同斷源助」同斷半四郎」同村年寄五郎兵衛」中野村庄屋三郎右衛門」金坂村年寄新四郎」釜出村庄屋茂十郎」門野村庄屋與三郎」吟味濟候上病死榊村庄屋三郎兵衛」（以下各村庄屋十名を舉ぐ）其方共義重作申口ニ隨ひ候義とハ相聞候得とも奉行所へ呼出候上は綴令重作差留候共一統ニ可罷出等

之處無其儀段奉行所を不憚仕方不埒ニ付爲過怠手鎖掛之其儘預ケ申付置候」但日數廿日切(朱)ニ而手鎖御免(書)「右之通申渡候條一件之者共可令承知候以上」寛延元(朱)辰十月

(二)當時と雖も、役人の處置の不當を申出でることは許るされたのである。次掲の大坂判例に就いても、之を知ることが出来るよう。

第九十四判決例 (御吟味物料書并御伺書控「收録」)

元文六酉年四月「刀屋次郎兵衛一件科書」鉦屋町白銀屋安兵衛借屋大塚屋伊兵衛義南久太郎町壹丁目大和屋七郎兵衛借家鮫屋傳兵衛ニ刀脇指小道具類賣懸ケ置候處代銀相滞三年以前未十一月廿一日出訴同十二月十八日對決翌十九日々三國彦十郎牧野郷左衛門懸リニ申付一件遂吟味追々呼出相尋候内去申五月十一日伊兵衛義右傳兵衛ニ賣懸ケ置候代ロ物行先吟味之義願書差出候節右願書之趣意牧野郷左衛門伊兵衛ニ相尋候得ハ伊兵衛義如何いたし候哉不申答候處外ニ壹人付添出候者願之筋引取相答候ニ付何者ニ而付添出候哉之譯相尋候得ハ伊兵衛叔父ニ而唐物町壹丁目刀屋次郎兵衛と申者之由申之郷左衛門義傳兵衛を依怙いたし伊兵衛願難立様ニ取斗候段重高ニ雜言を申候ニ付郷左衛門傳兵衛を令依怙候譯次郎兵衛兼而存知居候而申候義ニ而可有之條無會釋有躰可申旨及吟味猶又松浦丹左衛門羽津元右衛門懸リニ申付段々遂吟味候處申口不相詰候ニ付吟味之内次郎兵衛義去申六月四日入牢伊兵衛ハ所預ケ申付遂吟味候得ハ伊兵衛義獨身ニ而暮居候處南本町壹丁目下半太刀屋藤兵衛借屋刀屋清兵衛と申者仲人ニ而次郎兵衛妹同所壹丁目上半難波屋與吉

借屋鎖屋庄松祖母妙順方に養子聲ニ出煎罷越候筈ニ對談濟三年前未十一月十五日伊兵衛を妙順方に召連
參親子約束之盃等仕候節次郎兵衛義妙順方に會居是又以來叔父甥固之盃いたし候上早速引取妙順娘くら
と妻合可申由次郎兵衛申ニ付伊兵衛傳兵衛と懸り合有之當分難引越段申聞候得ハ様子尋候故具ニ咄候處次
郎兵衛申候ハ不願出候而ハ相濟間敷由令挨拶伊兵衛其夜ハ妙順方ヨリ罷歸候其以後傳兵衛方に段々催促候
處不埒故可願出存候得共訴狀等認候更並公邊に出候義不案内ニ付次郎兵衛ニ令相談候處訴狀認可遣旨申之
文言等次郎兵衛好忤喜ハニ認させ其後及吟味候時分も日々之様子相尋候故申聞候得ハ伊兵衛申取惡敷様ニ
申ニ付相手傳兵衛義牧野郷左衛門方に兼而立入候由傳兵衛ハ承り候段次郎兵衛ニ不斗相僞申聞候其以後も
次郎兵衛存念とも申教候通ニ取斗候更之由傳兵衛義郷左衛門方に立入候哉も不存勿論傳兵衛咄候更無之處
次郎兵衛僞り之義申聞吟味之上無申披段申之次郎兵衛申候ハ伊兵衛傳兵衛との出入訴狀文言好忤喜ハニ認
させ遣候義並吟味中自分存念共申聞候更無相達候傳兵衛義郷左衛門方に兼而立入候由伊兵衛申聞候故傳兵
衛ハ郷左衛門方に頼候而吟味永引せ候筋ニ而可有之と兼而疑居候處三年前五月十一日伊兵衛ニ付添出伊
兵衛願書之様子郷左衛門尋候節次郎兵衛相答候得ハ名前并指添出候譯答候ニ付郷左衛門に彼是雜言等申之
候更ニ而實ハ郷左衛門義傳兵衛を依怙いたし候更ハ勿論兼而傳兵衛立入候義も無之處不輕筋於奉行所ニ致
申懸ケ候段前後無思慮仕合吟味之上可申披様無之令後悔候旨申之候次郎兵衛忤喜ハ義訴狀認候趣意相尋候
得ハ次郎兵衛任申ニ無何心相認此節ニ至り令迷惑候旨申之候且又傳兵衛義刀脇差拵令渡世候者ニ候故郷左

衛門方に兼而立入間敷義ニ而も無之ニ付第一ニ遂吟味候處會而不立入由申之候一件片付申渡覺」酒井雅樂頭殿御附札寫(朱書)「刀屋次郎兵衛」紙面之通遠嶋可被申付候」黃紙付札」遠嶋可申付哉」右次郎兵衛義身

分ニ不抱公交出入を内證引請訴狀文言等自分差略を以拵忤喜ハニ認させ願人伊兵衛ニ差添奉行所に罷出尋之節當人不吞込故とく不能返答候處當人を差退ケ彼是申之其上懸リ與力依怙有之様ニ雜言申之ニ付兩奉行再應直ニ相尋實致依怙候、受ニ候得ハ無遠慮可申候御奉公筋ニも相成候、受之由相尋候處右之通申掛候得、早速可相濟哉と無思慮雜言僞り之義申懸ケ候段致後悔候旨申之伊兵衛訴狀文言等拵身分ニ不抱公交を引請其上與力に法外之申懸いたし候段は於番所あるハれ候同前之義重々不届ニ付諸色欠所取上遠嶋申付候」酒井雅樂頭殿御附札寫(朱書)「(中略)右之通申付候條一件并年寄丁人可令承知候以上」西四月」佐々美濃守殿松浦河内守殿」掛リ役人羽津元右衛門杉浦丹左衛門

「公事方御定書」下卷第六條『諸役人非分私曲有之旨訴并裁許仕置等之事』(「徳川禁令考」後卷第二、帙四七八頁)の第一項亦、同旨の原則である。御定書の此原則は又、大坂の原則でもあつたらうこと、右元文の大坂判例の存在よりして、推定に難くないと思はれる。

(三)當時、輕罪に就いて、未決入牢を以て、本刑に充當すると云ふ處置の構ぜられる場合があつた。次なる判決は、大坂に於けるその具體例の一つである(第六十三、第六十五判決例參照)。

第九十五判決例 (「諸吟味寫書」天明三年の分收録)

博奕仕候者一件「御仕置窺書」土屋駿河守(中略)此與兵衛儀伺之通令有免咎之不及沙汰段可被申渡候此與兵衛博奕仕居候場所ニ而看商ひいたし候段不埒ニ付急度叱リ置可申哉之旨可相伺處數日入牢申付置候間令有免咎之不及沙汰旨可申渡哉

「公事方御定書」下卷第九十九條『輕き惡事有之もの出牢之上咎ニ不及事』(徳川禁令考「後聚」第二帙三二五頁)の條の第一項は、殆んど同様の原則と云ふことが出来るであらう。

結

語

(一) 以上、嚴密には、近世中葉時代、大坂地方に行はれたる、刑事的法則の一斑を窺つたに止まると云ふべきであらうが、しかし大坂刑法一般の類推には、充分役立つものであらう。

(二) 以上、各節に於て、判例(元文乃至天明)に現はれたる、大坂近世中期の刑事制度と、「公事方御定書」上の刑事的原則との異同を考察して來たが、大坂のその殆んどすべてが、二三の例外はあるにしても、御定書上の規定と合致するか、或は少くとも相似たるものであつたと云ふ結果に到達したのである。而もその條項は、御定書下巻の刑事規定の約半數に及んで居るのである。さればとて、御定書がそのまゝ大坂にも行はれたりと速斷することは勿論出來ないが、御定書の原則と、御定書成立後の大坂の刑事的制度との間には、大なる差異が認められない事實から、『少くとも「公事方御定書」制定後五六十年間は、刑法的法則に就いては、大坂『奉

行所の定』も、原則として「公事方御定書」を遵奉して』（拙文「判例近世大坂私法一斑」中田先生還曆祝賀法制史論集所收一結語）居たであらうこの

推定は許るされるであらう（三浦博士「法制史之研究」一三九頁參看）。

（三）本篇揭示の判決例を、更に熟讀するならば、尙ほ徴して以て、當時の刑法内容を窺ふに足る箇所少くないのであるが、又掲げて以て參考すべき判例、法例も別に存するのであるが、既に多くの紙幅を費し、甚だ冗長に亘る嫌あるを以て、一先づ之にて筆を擱くことにする。

（昭和十四年二月一日稿了）